

<4月号より>

かおりを求めて 東西南北

ヴォーリス建築文化全国ネットワーク

第24回 「建築模型つれづれ」

景観模型工房 盛口 正昭

二〇一一年発行された「ヴォーリス建築マップ」に私は次のように寄稿している。

「学生時代、上京の折、品川駅近くの広い国道沿いに見えた明治学院キャンパスの印象は今でも忘れられない。その中核にあるのがチャペルであった。その後、私は建築模型の仕事を志すことを決意したのだが、今思えばこの時の鮮明な感動の記憶が常に私を後押ししてくれていたように思う。建築模型を本業としながら常に意識の底にあるのは記憶に刻まれた「心の風景」を形あるものにしておきたいという思いである」

以来、その思いのまま半世紀以上たった今も小さな工房で製作を続けており、ヴォーリス建築作品は現在までに下記の通り十九物件となつています。

「明治学院（礼拝堂）」

「同志社（アーモスト館）」

「神戸女学院（音楽館）（図書館）」

「関西学院（時計台）」「駒井家住宅」

「ツッカーハウス」「五葉館」「大阪教会」

「睡鳩荘」「浮田山荘」「ドゥミールハウス」

「南葵楽堂」「横浜共立学園（本校舎）」

「高碓記念館」「旧福島教会」

「京都バプテテスト教会」

「ピアソン記念館」「六甲山荘」など

これらの精密建築模型キット群はレーザー加工によるもので、その部材設計及び試作は当工房気鋭の模型作家「柴田美智子」によるものです。提示を受けた図面から部材組立のための全ての加工用データを作成し、加工・組立・微調整を何度か繰り返し完成となります。

建築模型業界もこの半世紀で劇的な変化が起こっており、当初我々は製図版と丁定規、極細シャープペンにて模型用の全体平面図を描き、全ての部材図をもれなく作成することから始まり

ます。その後は納期に追われながらも朝から晩までカッターと接着剤を使い、いつ終わるともなく延々と手作業を繰り返していったものでした。しかしその後のCAD作図、NC加工レーザー加工、3D加工などデジタル技術の登場と進歩は、それまでの製作状況を根底から飛躍的に覆すものとなりました。ありがたいことではありますが便利と引き換えに多くの作業が人の手から少しずつ離れていくことに、将来への不安と寂しさを感じ始めたのも事実でした。

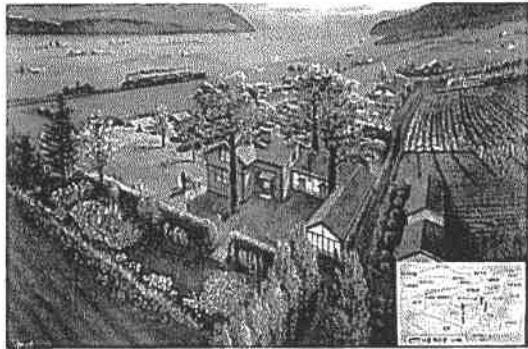
このような時代にもしヴォーリスさんがおられたら：などと考えてしまうことがあります。ある設計事務所の老建築家は、作成したCAD図の上をもう一度フリーハンドでトレースして成果品とされている方がおられると聞いたことがあります。時代の流れとはいえ決して手放してはいけない何かがあると思うのです。そして我々が街角で出会うヴォーリス建物群がいつも示し

てくれるやさしく温かいものにはその何かへのヒントが確実にあるように感じます。

それでは、上記の作品群の中から最近の作品を少し取り上げ、その製作過程やエピソードをご報告させて頂こうと思います。

『ピアソン記念館』：この建物は山形政昭先生監修の「ヴォーリス建築マップ」にある最北端の第二号建物で北海道・北見市にあります。一八八八年（明治二十一年）来日の

米国人宣教師G・P・ピアソン氏は当初、明治学院や千葉での教師生活ののち小樽を拠点に北海道での伝道活動を開始しました。一九一四年（大正三年）に米国の故郷の自然に似た北見の高台にこの建物を建設しご夫妻と移り住まれました。二人はこの高台を「みかし



大正時代の復元鳥瞰図（資料一）

わの森」（二本の柏の木のある森）と呼び、居宅前の通りには二〇〇メートルにわたるポプラ並木を植樹するなど記憶の原風景とともにこの町をこよなく愛され、一九二八年（昭和三年）帰国されるまでの十五年間の伝道を通してこの家は、開拓者と町民のための祈りの家となりました。

さて一昨年、ピアソン会の伊藤悟様からご連絡をいただき、北海道遺産の博物館展示を機にこの建物の模型製作が可能だろうかとのことでした。北海道遺産の登録件数が全部で七十四件とのことで展示スペースに制限があるためかなり小さくなり、当工房のキット模型をご希望でした。早速、資料・図面などを配信いただき製作の検討に入り、特にベースとさせていただいた資料が、二〇〇四年に描かれた佐藤元治郎氏に

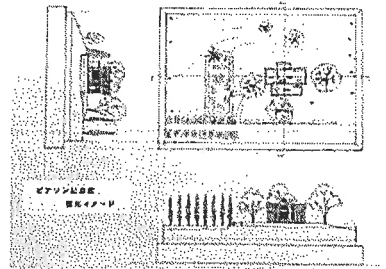
道遺産の登録件数が全部で七十四件とのことで展示スペースに制限があるためかなり小さくなり、当工房のキット模型をご希望でした。早速、資料・図面などを配信いただき製作の検討に入り、特にベースとさせていただいた資料が、二〇〇四年に描かれた佐藤元治郎氏に

よる大正時代の復元鳥瞰図(資料一)でした。市内の老人たちからの聞き取り調査や当時の写真を参考にされたもののように、きわめて貴重なものでした。「建物を囲むような大きな三本の柏の木」「高台からの夕日の眺め」「芝生の庭でくつろぐご夫妻」「ポプラ並木」「お花畑」「ピアソン寮」「日本館と呼ばれた和風建物」「丘の下の池」「遠くの北光社本部」「彼方に見える蒸気機関車」などなど…これら多くの要素を、表現スペースの制限から、どのようにしてまとめめるかがワクワクしながらも悩みどころでありました。

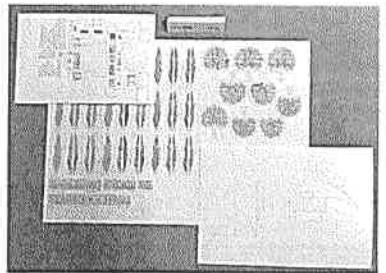
展示スペースが約二十五センチ×三十五センチ程度と制限されている関係上、検討・打合せの結果、縮尺を…三〇〇とし、「高台、三本の木、ポプラ並木、芝生のご夫妻、お花畑」の最



地形検討図 (資料二)



模型イメージ (資料三)



組立部材 (資料四)

低限の要素を表現することとしました。早速ご提示いただいた古写真や古地図、インターネットをフル活用し、土地の高低についてはグーグルの標高情報を頼りに凡その地形検討図(資料二)を作成し最終的に模型イメージの平面・立面図(資料三)を作成しました。記念館建物の製作については提示されたヴォーリズ図面をデータ化し、柏の木や、ポプラなどの樹木を含めたレーザー加工用の部材図を作成し、その後、加工↓仮組立↓調整を繰り返し、完成へと作業を進めます。さらにこれらの組立部材(資料四)を使って一般の方々にも製作いただけるように組立説



完成品 (資料六)



組立品 (資料七)

なおこの作品は昨年七月リニューアルオープンした「赤れんが庁舎(北海道庁旧本庁舎)」内に他の北海道遺産とともに展示されています。また今日までの工房作品事例についてはホームページをご参照頂ければ幸いです。(続)



組立説明書 (資料五)